この人に聞く

住職さんは、アーティスト 諸橋精光さんを訪ねて

プロフィール
１９５４年、長岡市千蔵院に生まれる
１９７７年、創形美術学校を卒業
１９８１年、大正大学を卒業
１９８２年、仏教童話の絵本刊行開始
１９８３年、超大型紙芝居の作成開始
現在　長岡・千蔵院住職、真言宗豊山派僧侶
絵本作家・紙芝居作家・実演家

編　集　部

長岡市柏町の千手観音・千蔵院に、住職の諸橋精光さんをお訪ねしました。

◇諸橋精光さんは、多忙な住職の仕事のかたわら、絵本作家、紙芝居作家として活躍の他に、大型紙芝居の制作と公演、校区の千手小学校の児童と共に創作紙芝居の制作・発表などを長年続けて来られました。

これらの幅広い活動のエネルギーは、どこから生まれているのでしょうか。

子どもの頃から絵を描くことが好きでした

小さい頃から絵を描くことが好きで、中学・高校とマンガ制作に熱中しました。しかし、だんだん「マンガでの表現」に行き詰まりました。人間を真上から見たり、下から見上げたりする絵が描けないのです。

これはデッサンを勉強するしかない。それで、デッサンや油絵を学ぶとその面白さにとりつかれて美術の方に進もうと思うようになりました。東京の美術学校に入り、デッサンや油絵の制作に没頭しました。

その後、私は寺の長男でしたので寺の跡を継ぐため大正大学へ行きました。

それまで仏教には興味がなかったのですが、実際に勉強してみると、仏教はとても面白く、奥深いものがあります。私は、今度は仏教にすっかり夢中になってしまいました。

こうして、私は、絵と仏教という二つの大きなテーマをかかえて寺に帰ってきたのです。

しかし、寺に入ってしばらくはこの二つはつながることはありませんでした。それに私の寺は祈願寺ですので来客が多く、絵の制作になかなか集中できません。寺の生活と絵の制作がかみ合わず悶々とした日々を送っていました。

仏教説話を　月に一冊のペースで絵本に

そんな中で生まれてきたのが、仏教のお話し絵本の制作でした。毎月十七日の縁日に毎月一冊のペースで、参拝する人たちのために仏教説話の絵本を作り始めたんです。これは、三十年近く作り続けて三〇〇冊を超えました。

最初は、ホッチキス止めの簡単な作りでしたが、分かりやすく読みやすいので、お年寄りやいっしょのお孫さんにも喜ばれました。それが、病気見舞にも重宝がられ、入院患者にも広まるなど思わぬ広がり方をしました。

始めたころ、十作目くらいで話の種が尽きたのですが、仏教のお話しをさがすうちに「仏教説話大系」（全四十巻）に出会い「宝の大鉱脈」を発見したように興奮しました。

絵本制作の作業はけっこう大変な作業ですが、続けることでどんどん技量がついて表現力が養われ、ますます面白くなりました。

お寺の仕事の合間に紙芝居や絵本の制作をしますので、来客があると応対し、終わると戻って続きに取りかかります。そういうことを五年十年と繰り返すうち、さっと気持ちを切り替え、短時間に集中して描けるようになりました。また、絵本や紙芝居の展開や構成、核心場面も、お話を読んだ瞬間に掴めるようになりました。

絵本や紙芝居の制作は軌道にのるまでが苦しくて、きつくて逃げたくなることもあって、うまくいかないときは悶々と苦しむのですが、必ず出口に出ると信じて描いています。そして完成した時はそれまでの苦しみがふっとびます。

まあ、自分の好きなことですから、苦しくても遊びの延長なんです。

＊諸橋さんの絵本や紙芝居の多くは出版されています。

①仏教説話関係の他

②身近な体験に基づくもの

③他の作者の原作に絵を付けたもの

に大別されるようです。

①『般若心経絵本』『ジャータカ絵本』『小僧さんの地獄めぐり』『おしゃかさま』『地獄極楽絵本』など多数

②『はしれ！チビ電』『とべ！カーピー』など、今も残る近所の風景と共に描き込まれています。

③『なめとこ山のくま』（高橋五山（注1）賞受賞）『茂吉のねこ』『モチモチの木』（土屋文明記念文学館賞受賞）、宮沢賢治・松谷みよ子原作など多数。

＊長岡市立中央図書館の児童閲覧コーナーに、郷土出身・在住作家として、科学絵本作家の松岡達英さんと並んで展示スペースが設けられています。

子ども祭りのメインイベントとして「超大型紙芝居」を制作

わたしはもともと子どもが好きなので、寺に帰るとすぐ、寺の夏の行事の一環として「子ども祭り」を始めました。夏休みのラジオ体操などに案内チラシを配ったら三〇〇人もの子どもが集まりました。

ゲームをして、お参りをして、お菓子袋をもらうだけのささやかな行事でしたので、次の年、何かメインイベントがほしいと思いました。それで、いろいろ考えるうちに、子どもたちが寺に掛けてある地獄極楽図を真剣に見入っていたことを思い出し、あれを何とかできないかと思ったのです。

はじめは、畳十枚分くらいの大きなパネルに地獄絵を描いて絵解きしようと考えました。しかし、そんな大きな物を作ったら、後でしまうのも、次の年また組み立てるのも大変です。ならば、それをバラバラにして順番にめくればいい。

そうだ！紙芝居だ！と思い至ったのです。

それで90㎝×130㎝くらい大きさのダンボール紙に、ネオカラーという遠目のきく絵の具を使って三ケ

月ほどかけて地獄の紙芝居を完成させました。はじめっから三〇〇人の子どもたちに見せることが前提でしたから超大型の紙芝居でスタートしたわけです。

さて、それを実演する段になって地獄を題材にしていますし、超大型の紙芝居ですから、効果音を入れてもいいのではと思いました。

それで、お寺にある鳴り物、太鼓・銅鑼・妙鉢・ホラ貝など使ってやってみたのです。

すると、物語はもり上がり、地獄のこわさが際立ちます。そして、何より、語りによって紙芝居の絵が生命を吹きこまれて生き生きと動き出すように感じられるのです。

自分が描いた作品世界が、語りと効果音によってぐーんと広がったように感じられるのです。

紙芝居って何て面白いんだ！

その時のふるえるような感動・衝撃は、生涯忘れられないものとなり、その後の制作につながっていきました。（正力松太郎賞（注2）本賞を受賞）

芝居実演家として有名な、声優・右手和子（故人）さんとの出会いも忘れられません。繊細で深い語りに、絵の至らなさに気付かされたこともありました。右手先生との出会いによって、その後は児童文学の紙芝居に挑戦するようになりました。

宮沢賢治の「注文の多い料理店」などを絵に描いてみると、物語が本当に良くできていることが分かります。読んでも分からなかったことが、場面に描き分けてみると理解が深まることもあるのですね。

絵本は世界中どこの国にもありますが、紙芝居という表現形式は、日本独自のものだそうです。

けれども、紙芝居には戦中、愛国心や戦意高揚にも利用された負の歴史もあり、戦後の街頭紙芝居などには俗悪な内容のものもありました。昭和三〇年代に入って高度成長と、テレビなどの普及で、紙芝居の出番は少なくなりました。

けれども、紙芝居という表現形式のもつインパクトはとても強いのです。クオリテーの高い作品は、芸術性も高く、他の芸術と比べても懐が深く、劣ってはいないのでは…、紙芝居には、ものすごく大きな可能性があると思っています。

◇近所に住んでいた私（田口）の父が「本当に怖かった」と言っていた地獄絵についてどのようにお考えですか

現代の子どもたちにも「恐ろしさ」の擬似体験は、どこかで経験していてもよいのではと考えています。

この大型紙芝居の取り組みは、そもそも子どもたちが真剣に、お寺の地獄・極楽図に見入っていたことがヒントなのです。

地獄の紙芝居を見た親の反応は、二つに分かれます。「親が教えられない大切なことを子どもに教えてくれた」と感謝してくれた母親がいる一方で、「何であんなに子どもを怖がらせるような紙芝居をやるのか」と憤る母親もいます。

地獄はお化け屋敷ではありません。こわさを通して伝えようとする智恵がそこにあるわけで、両者の違いはそれを理解するかしないかというところでしょうか。

子どもたちは、目をまん丸くして、ぴくりとも動かずに画面に見入ってくれます。子どもたちは理屈なく地獄に引きつけられるのです。そして、地獄の強烈な責め苦を見ることによって、子どもたちは自分の生の延長に、ウソをつき悪いことをすると、ものすごくおっかないものがあることを知るでしょう。

しかし、それでも人間はやっぱりウソをつき、悪いことをしてしまいます。

大事なのはそれからです。たとえ、「地獄なんてあるわけない」と思ったとしても、完全に否定できませんから、地獄はもしかしたら本当にあるかもしれない。自分は死んだら地獄かもしれない。そういう思いは残ります。そして悪いことへの後ろめたさが生き続けます。

この後ろめたさが大切です。それがあるから、私たちは自分と向き合い、悪いと知りつつ止められない人間の悲しさに気付いていくのではないでしょうか。

地獄という人間を超えた本当におっかないものがあることによって、私たちはいい加減で危うい自分の心を律し、正直にそれを見る視点を得るのです。どんなに悪いことはいけないと教えても、悪いことをしてしまうのが人間です。仏教は人間というものをよく知った上で、この地獄の教えを今に伝えてきたと私は思いたい。私は人間を深く見つめてきた仏教の智恵というものを信じたいと思うのです。

ところで、地獄は描く側からいうと実はとても楽しい題材なのです。かつて地獄絵を描いた絵師たちも思う存分想像力を広げ、表現の喜びの中で鬼たちを描いていたに違いありません。地獄絵というと恐ろしいイメージばかりですが、実はその造形世界はとても楽し

いものなのです。

「長岡空襲　みちこのいのち」の制作について

この紙芝居の話は、最初、長岡空襲紙芝居「思い出の記」（高橋直矩原作・絵）の語り手として活躍されている今井和江（新潟ひょうしぎの会代表）さんの原案の添削をたのまれたことから始まったのです。添削するうちに脚本と下描きができ上ってしまい、じゃあ、自分がやろうかということになったのです。

この空襲の紙芝居を描いていくと八割方が「炎の世界」です。これを私は、地獄の炎で描写しました。

かつて地獄の紙芝居や絵本を制作したことがあるので地獄の炎の形式は頭に入っています。それを使ったわけです。形式化された地獄の炎には、日常目にする炎とは、けたちがいのすさまじさがあります。

私は実際の空襲体験はないけれども、「空襲はまさに地獄だった」という体験者の話をきいたことがありましたから、これでいいのかなという心配はありましたが、なんとか紙芝居を完成させることができました。

完成後、年配の空襲体験者に見て貰ったところ「この通りだった」と言われ胸をなで下ろしました。

＊長岡空襲は、一九四五年終戦間際の八月一日に米軍B29（大型戦略爆撃機）による無差別爆撃で一四八六名が犠牲になりました。

＊題材は、空襲に逃げまどう中で背中に負ぶった長女のみちこさんを亡くした七里アイさんの体験談です。七里さんは長岡空襲の語り部として長く活動を続け二〇一二年に八七歳で亡くなられた方です。

＊若い世代に平和のバトンを引き繋ぐ試みが、全国でも長岡でも模索されています。

＊紙芝居の語り手が、直接体験した語り部に代わり、子どもたちに平和の尊さが引き継がれていくことでしょう。

＊この紙芝居は、二〇一八年の一月には、長岡市内の全小学校・図書館、長岡戦災資料館などに配布され閲覧・貸し出しの予定です。

（注1）高橋五山は、教育紙芝居の創始者。

（注2）仏教精神に基づき青少年・幼児の健全な育成に貢献した個人・団体に与えられる賞。

（田口孝・河合靖久　文責）